

じゃりみち

…被災地支援情報…

第117号 発行日 2020.5.20
被災地 NGO 協働センター
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702
HP:<http://ngo-kyodo.org/>
Facebook:<https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO>
E-mail:info@ngo-kyodo.org
口座番号:01180-6-68556(郵便振替)

阪神・淡路大震災と新型コロナウイルス

阪神・淡路大震災から2020年1月17日で、25年が経過しました。当センターでは、昨年、震災25年に向けた寺子屋を開催してきました。寺子屋の詳しいまとめは、じゃりみち117号に記載してあるので、そちらを参照してください。

阪神・淡路大震災から25年の今、世界では新型コロナウイルスによる感染症が猛威を奮っています。日本でも緊急事態宣言が発令され、多くの施設や飲食店などが自主的に休業するなど自粛が広がり、小中学校も休校が続いている状況です。まさに世界規模の災害ともいえるでしょう。アルバイトが激減してしまい、退学を検討している大学生、学校が休校となり、給食がなくなったために満足に昼食が取れない子どもたち、家庭内暴力も増加していると言われています。どんな災害も、平時からの課題を顕在化させ、弱い立場の人々をより弱い立場へと追いやっていきます。

こうした危機を乗り越えるためには、何が必要なのでしょうか。ありていに言えば、「みんなで支え合う」ということでしかないでしょう。この「みんな」とは非常にポジティブでもあり、一方でネガティブにも作用するものです。例えば、「みんな我慢しているのだから、あなたも我慢すべきだ」という論調は、みんなで支え合っているかのように見えて、苦しい人を排除してしまっています。つまり、自分たちと同じ考えをしない人、同じような行動をしない人は「みんな」の中に入れてはいけません。そうではなく、「みんな」を広げていくこと、つまり、自分と反対の意見を持つような人たちとも支え合おうとすることこそが、重要ではないかと思えます。

現代は、インターネットの普及と発展、移動手段の確立などにより、世界中の人々がつながることができるような時代になりました。SNSなどを使えば、より簡単に人とのつながりが作れます。しかし、新型コロナウイルスは、こうした人類の発達したグローバリズムによって世界各地へと広がっていきました。つまり、人とのつながりが

容易であるからこそ、感染症に対して脆弱な世界になっていたということです。また、簡単につながりが作れる技術があるにもかかわらず、「無縁社会」とも言われるような孤独な社会が一方では問題となっています。

このことをどのように捉えればよいのでしょうか？一方ではSNSなどを駆使し、「みんな」がどんどん広がっています。しかし、「みんな」は同じような考えを持った人たちです。一方では、「みんな」に入れない孤独な人々が暮らす社会も広がっています。両者ともに、キーワードは「つながり」です。「つながり」があれば良いのではなく、どのような「つながり」なのか、ということがこれからの社会を構想する際に、とても重要なのではないのでしょうか。

阪神・淡路大震災の災害ボランティアは、目の前の人に向き合い「最後の一人まで救おう」と、被災者との「つながり」を作り出しました。それは決して、被災者を排除しない、取り残さないぞ、という「つながり」ではなかったのでしょうか。阪神・淡路大震災から25年が経過し、未曾有の災害に見舞われている現在に必要なことは、もう一度「最後の一人まで救おう」という、誰も排除しない包摂的な「つながり」を取り戻していくことであると感じます。(頼政良太)



25th
1995-2020

台風19号支援活動報告

2020年2月6日、栃木市富士見町で開催された「水害の体験を語る会」に、コメンテーターとして参加しました。富士見町の自治会には、月に1回集まって、様々なイベントを催す「やってみよ場」という企画があります。今回は、台風19号での被災経験を語ることをテーマに開催されました。参加者50名弱でしたが、普段は20名程度とのことなので、住民のみなさんの関心の高さがうかがえます。

司会の進行に沿って、参加者が自由に自分の体験や想いをお話されました。富士見町のみなさんは今回、地区のそばを流れる巴波川は気にしていたけれど、離れた永野川が決壊したことは予想外だったとのこと、「寝耳に水で、突然水がわいてきたような感じ」と語りました。ただ、気候変動の影響も考えると、台風19号のような豪雨は今後ほかの地域でも十分ありうると思われれます。

また、ボランティアに関して、「今回ありがたさを実感した」という方もいる一方で、「具体的に何を願っていたらいいか」「頼むほどでもないかと思って自分でやってしまった」という方もいました。ただ、よくよく聞くと「畳は持ち上げられると思ったら、水を吸ってすっごく重い」との声もあり、みなさんかなりのご苦労があったのだと思います。助け合いのコミュニケーションを考えさせられます。



富士見町を含む地区の自治会連合会では、すでに河川整備に関する陳情書を市に提出しているそうです。当事者の声を行政に届けようとする力はとても重要だと感じます。一方で、行政に任せきりにするのではなく、地域でできることは地域でやることも重要です。会では、隣近所での声掛けや、困った時に手を差し伸べられる関係づくりをしていきたいと思いますというコメントもありました。自分の経験を話し、分かち合い、そのプロセスで地域の関係をつくっていくために、とても有意義な「やってみよ場」でした。

栃木市では、自力で家の補修などをする住民の方向けに、工具や車両を貸出しする「災害復旧サポートセンターとちぎ」を立ち上げ、1月下旬にオープンしました。セン

ターのご案内を兼ねて、戸別訪問しました。

「泥を運びたいけど、今は衛生センターが平日しか受け付けていない。けど仕事2か月も休んでいたのもう休むわけにもいかない」という方や、「床下がベタ基礎だからなかなか乾かない。業者を待っているところなんだけど。床板まだ半分開けてる状態」という方など、個別のお困りごとを抱えている方はまだまだいらっしゃいます。4月に入っても、ゴミ・泥の運び出しや家財の移動などのために、車両を借りられる方はいるそうです。



また、「床下に泥が残ってたんだけど、もうフタしちゃったの。生活もしないといけないし、寒くなるし。後からカビが生えてくるかもしれないけど…カビが生えて家がダメになると、私が死ぬのとどっちが早いかな」という方もおり、これから暖かくなってからの住宅・健康被害が懸念されます。

新型コロナウイルスの影響で、3月以降、現地を訪問することが難しくなっていました。「とちぎ市民活動推進センターくらら」のスタッフに状況を伺ったところ、「被災者の状況は落ち着いてきているけど、引っ越しして空き家が増えた。市外に出た人は、元の地域ともなかなか交流がないんじゃないか」「(新型コロナウイルスの影響で)集まらないのが一番きつい」ということでした。集まらない分、自治会では総会資料を戸別で配布する形にしており、コミュニケーションのきっかけにしているそうです。このような状況下で、今後どのようなまちづくりをしていくのか、地域を誰がどのように支えていくのか、大きな課題です。(立部知保里)

佐賀豪雨災害支援活動報告



昨年、8月に豪雨によって大きな被害を受けた佐賀県武雄市での支援活動を継続しています。武雄市では、地元有志によって設立された民間の「おもやいボランティアセンター」が継続して被災者支援にあたっています。おもやいボランティアセンターを運営するチームおもやいは、3月に「一般社団法人おもやい」となり、地域の復興

です。こうした取り組みは、実は被災後の復興には非常に重要なことだと思います。被災者が出来ることはやってもらい、出来ないことは知恵とネットワークで支える、ということが復興につながっていくのだと思います。

新型コロナウイルスの影響もあり、なかなか以前の通りの活動はできませんが、手作りマスクを配るなど、「おもやい」の活動は継続しています。当センターもしばらくは遠隔となりますが、「おもやい」と共に被災者支援を継続していきます。(頼政良太)

に向けて継続した活動に取り組んでいます。

おもやいボランティアセンターの特徴は、徹底して地元の人々が中心になるという点です。多くの外部支援団体がやってきましたが、必ず地元の方々の想いを中心として活動を展開してきたという点が、他の団体にはあまりない点であると言えるのではないのでしょうか。チームおもやいは、水害発生直後から、定期的に「おもやいカフェ」という意見交換の場を開いてきました。1月には、私も参加させてもらったのですが、その場では支援に携わる人たちだけでなく、地域で被災をし、どちらかと言えば支援を「受ける」立場の方も一緒に参加していました。この回のおもやいカフェでは、「おもやいの樹」に自分のやりたいことを貼り付けていく、というやり方をしていったのですが、様々な方が自分の思いを書き込んでくれました。その中で、被災をしてしまって今は中断しているけど、子ども食堂をやりたい！という力強い想いを発表された被災者もありました。すぐさま、このおもやいボランティアセンターの場所を使って実現しましょう！という声もあがり、様々な取り組みへとつながっていきます。このように、被災者であっても、支援者であっても、そうでない立場の人であっても、「やりたい」と思うことにチャレンジできる場として、「おもやい」が成り立っているの

▼おもやい通信からの抜粋

これからのおもやい

3月19日、「一般社団法人おもやい」を設立いたしました。
恒常的な団体として、今後もこの地域の「復興」を目指して、活動を継続して参ります！

地域共創事業

- おもフェス
- おもやいカフェ
- 子どもの遊び場
- 交流拠点づくり
- 木もくひろば
- インキュベーションオフィス
- 相談業務など
- 地域おこしの取り組み

防災まちづくり事業

- 避難計画づくり
- 防災対策の検討
- 森林整備による防災の取り組みなど

災害救援事業

- おもやいボランティアセンター
- 県内外の災害時におけるネットワークづくり

「ここに住んでいてよかった」と思えるために
それぞれの「やってみたい」「こんなのがあったら」を実現していきましょう！



西日本豪雨災害支援活動報告

2018年の西日本豪雨で大きな被害を受けた広島県安芸郡坂町。今年の3月に復興公営住宅が完成し、4月から入居が始まっています。新型コロナウイルスの影響を受け、入居説明会などは当初の予定を変更するなどありましたが、多くの方が引越し作業を進めています。多くの方が仮設住宅から引っ越しをされる中、自宅の再建を目指して仮設住宅にまだ残っている方もいらっしゃいます。こうした方々を引き続きサポートしていく必要性も高まっています。

坂町の仮設住宅は、最も大きな被害を受けた小屋浦地区に建設されるものと、被害を受けていない北新地地区に建設されるものの、大きく分けて2つです。そのほか、小規模の公営住宅も建設されています。当初の見込みよりも申し込み数が多かったため、公営住宅はマンションタイプのもも建設されています。ほとんどの方が一戸建てで生活をされていたため、マンションでの共同生活ははじめてだという方もいらっしゃいます。また、



北新地地区では新たにマンションが建設され、多くの人たちが移り住んでくるということで、既存の住民協（坂町では、自治会のことを住民福祉協議会（略称：住民協）と呼んでいます）の中に入れてもらうのか、新たに公営住宅のみの住民協を設置するのか、ということも議論さ

れています。いずれにしても、新たに引っ越してくる方々と、受け入れる地域の方々とのつながりや交流が今後必要となっていくでしょう。

被害を受け、仮設住宅に暮らしている人たち全てが坂町の中に新たな生活の場を決めたわけではありません。大きな被害を受けた地域の方々は、雨が降るたびにまた大きな土砂崩れが起きるのではないかと、という不安と隣り合わせで生活をされています。中には、こうした不安のために、坂町を出て他の市町で暮らすことを選択される方もいます。しかし、若い世代であればまだしも、高齢者の場合は、住み慣れない地域へと引っ越ししていくことは非常に勇気がいることです。また、地域にとっても今まで住んでいた人が移住してしまうことで、人口が減少していきまいます。今後の住民協の活動の維持などを考えても、出来るだけ戻って来て欲しいという意見もあります。さらに、次の災害の不安を軽減していくためにも、防災の取り組みが求められています。

当センターでは、坂町の仮設住宅やみなし仮設住宅の住民を支援する「地域支え合いセンター」が発足して以来、坂町役場と地域支え合いセンターの職員との間で、運営や課題を話し合う会議のメンバーとして関わって参りました。この会議では、坂町の各課の取り組みや課題を



共有したり、過去の災害の事例などを参考にするような話し合いを続けてまいりました。今年度からは、兵庫県立大学の方や地域の住民協の方々とも協力しながら、防災につよいまちづくりをサポートしていきたいと考えています。

公営住宅への入居がひと段落すると、見かけの上ではいったん落ち着き、以前のような暮らしが戻ってきたかのように見えます。しかし、実際には、個々の人々の課題が潜在化し複雑化しているということなのです。引き続き、住民のみなさんと向き合いながら活動を継続していく必要性を感じます。（頼政良太）

＊2020年度は、独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業を活用しています。

共に「住み良い社会」「災害に強い社会」を築いていくために、継続的な寄付にご協力をお願いします。

マンスリー サポーター募集中

マンスリーサポーターは、クレジットカード
で毎月定額のご支援をいただくサポーター制度です。

被災地 NGO 協働センターは、阪神・淡路大震災以来、様々な被災地を支援している団体です。

昨今、災害は頻発し、巨大化しています。そうした災害に対し、より迅速に支援に入るため、そして、平時から災害に備える活動をより充実させていくために、みなさまのご協力をお願いします。

*いただいたご寄付は、被災地支援活動、災害に備える防災・減災の活動、啓発活動、ネットワークを広げる事業などに使用させていただきます。

【方法】

被災地 NGO 協働センター HP
<https://congrant.com/project/ngokobe/632>

「ご協力方法」のページからマンスリーサポーター申し込みフォームに誤入力をお願いします。右の QR コードでもお申し込みいただけます。



マンスリー サポーターとは？

クレジットカードで毎月定額のご支援をいただくサポーター制度です。毎月のご支援は長期的な運営を行う上で大変貴重です。

お申し込みは、用紙の記入、銀行での手続きなどは不要で、クレジットカードとインターネット環境があれば申し込み可能です。

毎月 1000 円、3000 円、5000 円のコースをご用意しています。

是非、ご協力をお願いします。

被災地 NGO 協働センター

〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通 2-1-10

TEL : 078-574-0701 FAX : 078-574-0702

E-mail : info@ngo-kyodo.org



新型コロナウイルス感染症の支援に

ご協力をお願いします。

～CODE は世界と日本をつなぎます～

2019年末、中国・武漢市で感染が確認された新型コロナウイルスは、世界200以上の国と地域で感染者約460万人、死者31万人以上の世界的なパンデミックを引き起こしました。CODEは、被災地支援の経験とネットワークを最大限に活用し、国際アライアンスを立ちあげ、世界各地の経験や取り組みを共有・発信しています。支援から取りこぼされていく「最後の一人」を大事にしていきます。ご支援・ご協力よろしくお願ひいたします。

■現在の取り組み

- ・国際アライアンスで世界の仲間たちとコロナ危機に対する取り組みや経験を共有し、共に解決の道を探していきます。(日本でのボランティアなどの取り組みを教えてください。世界へ発信します。)
International Alliance for COVID-19 Community Response HP:<http://www.iaccr2020.net/>
 - ・海外のカウンターパートを通じて途上国の厳しい状況の人たちを支えます。
 - ・コロナで困窮している日本の若者たちを支え、応援します。
 - ・最前線で戦う医療従事者を支えます。
- (マスクやアルコール消毒液などの提供)⇒マスク、アルコール消毒液を募集しています。ご提供いただける方、事務局までご連絡ください!

ご寄付の方法

■銀行振込

ゆうちょ銀行

支店名：〇九九店
(ゼロキュウキュウ)
支店番号：099
口座番号：0330579 (当座)
口座名義：CODE

近畿労働金庫

支店名：神戸支店
支店番号：642
口座番号：8881040 (普通)
口座名義：CODE海外災害
援助市民センター

■郵便振替

口座記号番号：00930-0-330579
加入者名：CODE

■クレジットカード

CODEのHPよりご寄付いただけます
<http://www.code-jp.org/cooperation/index.html>



■事務局ボランティアも募集しています!

私たちと一緒に活動して下さるボランティアさんを随時募集しています! 初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGOや市民社会、防災・減災のことも学ぶことが出来ます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。



当センターの姉妹団体「CODE 海外災害援助市民センター」の活動にもご協力よろしくお願ひします。

■編集後記

新型コロナウイルスの影響で、様々なところで、自粛が行われています。当センターの活動も例外ではなく、なかなか被災地に通うことが難しくなっていました。出来るだけ、離れていても出来ることを模索して活動したいと考えています。

自粛期間中には、様々なことが自由にできなくなってしまいました。私の家でも、子どもが保育園に通えず毎日家で過ごしています。そうすると、不思議なもので、家で遊んで過ごすためのアイデアがたくさん出てきます。近所の公園には、たまに遊びに行くのですが、毎回同じ公園なので、あの手この手で遊びを考えないとつまらなくて飽きてしまいます。

このように、一見すると、とても自由が制限されているように見えますが、その実、遊びの自由度や発想の自由度はむしろ増えているように思います。

新型コロナウイルスによる自粛期間が終了しても、この新しい「自由」の発想を忘れずに、活動にも活かしていきたいと感じる今日この頃です。(頼政良太)

■入金・カンパのお願い

被災地NGO協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。下記の振込先によりしくお願ひ致します。

- ★団体会員 年会費¥10,000 × 1口以上
- ★個人会員 年会費¥3,000 × 1口以上
- ☆団体賛助会員 年会費¥10,000 × 1口以上
- ☆個人賛助会員 年会費¥3,000 × 1口以上
- ☆自由選択会員 年会費¥ 任意の額

■郵便振替 加入者名：被災地NGO協働センター
口座番号：01180-6-68556

■ゆうちょ銀行

支店番号：一一九 (イチイチキュウ) 支店/店番：119
当座 0068556 / 受取人名：ヒサイチ NGO キョウドウセンター

■クレジットカードでのご寄付

クレジットカードでも会費やご寄付をしていただくことができます。下記URLもしくは右のQRコードからお願ひします。

<https://congrant.com/project/ngokobe/605>



第66号 2020.05.20



発行所：被災地 NGO 協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 HP:http://ngo-kyodo.org/



東日本大震災から9年・・・

震災から9年、まさか新型コロナウイルスという災害に見舞われるとは思ってもみなかった。9年目にしてやっと再建の道を歩みだしはじめたばかりでのこの災害は被災者にダブルいやトリプルの打撃を与えています。人と人の物理的交流を阻むこの新型ウィルスを前に、いま「最後の一人まで」をどう支えるのか、ポストコロナを生き抜く上にも、25年前の阪神・淡路大震災の経験、そしてその後培われた私たちの人間力が試される時です。

東日本大震災の発生から9年が経過しました。今年の3月11日は、例年とは違い新型コロナウイルスの影響で縮小や自粛などが多く、静かな3月11日となりました。死者1万5899人、関連死は3,739人、行方不明者2,529人です。犠牲になられた方たちには心よりご冥福をお祈り致します。そして、震災避難者はいまだ4万7737人(19年12月9日現在)に上ります。避難者の数には福島県などからの自主避難者の数が入っていないので、その方たちを含めるともっとたくさんの方が不自由な生活を強いられています。岩手、宮城、福島3県のプレハブ仮設住宅には4月時点で残り60世帯となり、公営住宅や民間物件を借り上げる「みなし仮設住宅」には4月以降、少なくとも約900世帯が住み続けているようです。



3月11日午後2時46分、私たちは拠点の仮設があった陸前高田市のモビリア仮設住宅の展望台で住民さんとも祈りを捧げました。この日集まったのは約20人の住民さん、仮設にいた人、引っ越した人、いまでも仮設にいる人など、この仮設住宅でつながった人たちが参加していました。この仮設住宅も3月いっぱいでは解消されます。中には、息子さんが津波で流された母親がいて、当時のことを話してくれました。その80代の母親は「息子がね、津波で亡くなったんだ。震災から2ヶ月経ってから海の中から遺体が見つかった。携帯電話がズボンのポケットに残っていたんだよ。それでも引き渡しにはいろいろ調べなきゃなんないから時間がかかったよ。」と。9年経ってもその傷が癒えることはありません。

また、みなさん口々に「週に一回必ずこの仮設の集会所に体操に来ていたんだよ！この場所がなくなると集まる場所がなくなるから寂しいね。ここにきたらみんなと話して大笑いして帰るんだ。それが楽しくてね」と名残惜しそうにそれぞれが思い出話に花を咲かせました。

その中の一人まけないぞうの作り手さんのお話をお聞きしました。当時、保育所に通っていたお孫さんが避難先でずっと「家に帰りたい！」と訴えていたそうです。それで一度お孫さんと自宅を見にいったそうです。自宅は基礎だけ残して全て流されていました。お孫さんはその自宅を見て「波がじゃぼん、じゃぼんっておうちを持っていったの??」と…。それから「お家に帰りたい」と言わなくなったそうです。小さな体と心でその現実を受け止めたのでしょうか。それでも作り手さんは「津波で全部持ってかれた。でも命だけは助かったから幸せ」と話してくれました。

被災地を訪れる度に、いろんな方のお話を聴きますが、9年経っても初めて聴く話が多いです。本当に当たり前のことですが、被災者ひとり一人に物語があります。この物語一つ一つを将来世代に伝えていきたいと強く思いました。

被災地では仮設住宅が解消しつつあります。阪神・淡路大震災では5年目に仮設住宅がすべて解消されました。東日本大震災では、10年で仮設住宅がほぼ解消される予定です。沿岸からは、人口が流出しているところがほとんどです。都市部のように今後の人口増加の見通しは厳しくまちづくりにも頭を悩ませています。復興住宅では家賃上昇で出ていかざるを得ない人がいたり、コミュニティの形成など被災地ではたくさんの課題があります。やっとの思いで終の棲家を確保したのに、体調を崩している人も少なくありません。被災者の「くらしの再建」は9年経ったいまやっと始まったばかりです。いやいまだ再建の方向性を決められない人がいるのも事実です。そこへ新型コロナウイルスが被災地に追い打ちをかけています。

この被災3県で行われた岩手県立大などのアンケート調査では復興住宅に入居した人の7割が「誰が入居者かどうかかわからない」と答えているのです。また、「困りごとを相談する相手がない」と答えている人は50%近くもいます。

信じられないかもしれませんが、当初はまけないぞうの作り手さんの中で、復興住宅に入居後、慣れない団地暮らしで、エレベーターの乗り方がわからず、趣味の畑や花植えもできず、家に引きこもりがちになり、体調を崩した人もいます。

また、防災集団移転をした人の中には、約30戸近くある高台に引っ越し、家がこんなにあるのに昼間は誰にも会わず、気が滅入り「仮設の方がよかった」と、数ヶ月うつ状態が続いた方もいました。「仮設の方がよかった」というこの言葉は、25年前阪神・淡路大震災でも聞きました。



そんな中でも、明るいニュースとして、作り手さんの中で最後まで仮設に暮らしていた方が（前回のじゃりみちでも紹介）やっと念願の自力再建を果たしました。高齢の彼女が再建を決めたのは、親せきの子どもに、「おばちゃんまでいなくなったら僕は帰る場所がなくなる！」と言われたからです。“故郷を残してあげたい！”という強い意志が彼女の中に芽生え、再建を決意したのです。



そして、1月15日の引っ越し当日、お手伝いに行きました。自宅には宮司さんが来て、厳かな儀式の中で無事に神様を迎え入れました。家族や親戚、仮設のお友達やボランティアなどが集まり、彼女の人が柄が伺えます。宮司さんもびっくりして「あんたこんなに子どもいたっ

け??」と冗談交じりに聞くと、「津波のお陰でみんなに会えたんだよ!」と、「津波のお陰」と言われたのです。複雑な気持ちですが、同時にうれしくもなりました。

実は、彼女はこれまでまけないぞうで



度も使わずに貯金していて、そのお金で、「再建した家に記念になるものを買うんだ」と言っていました。そのお金で茶箆筥とソファを買いました。引っ越しの当日に届いたその記念品をうれしそうに娘さんと披露してくれました。彼女はそれを「一生の宝物だもの」と満面の笑みを浮かべていました。

まけないぞうの作り手さんも、まけないぞうを通してたくさんの方とつながっているというコミュニティによって、孤独死の前にある「孤独な生」を回避しながら生きているのだと実感します。それはもちろん、まけないぞうだけでなくいまなお、いろんな形でかわり続けているボランティアがいることが、重要な役割を果たしているからだと思います。

そしてそれはきっと、被災者とか支援者という関係を超えたつながりで、今後も細く長く続いていくのだろうと想像します。



震災直後のがれき撤去といった目に見えるような活動ではありませんが、9年経っても、いやそれ以上にこのような関りや活動が続いていくのでしょうか。これからもまけないぞうを通して、細く長くご支援いただければ幸いです。これからもよろしくお願ひします。
(増島 智子)

～被災者のつぶやき～

津波の後に、避難所には行かずに避難生活をしていて、電気製品が欲しいと思って内陸のお店に出かけた。お店に行くと、知らないおじいさんが『沿岸からきたのか?』『はい、そうです』と答えると『ちょっと待って』と。戻ってくると『これ何か足しにしてくれ』と2000円を手渡されたんだ。知らない人なのにほんと涙でたよ。